



2007 平成19年

発行 ● 狛江市市民協働課
〒201-8585 狛江市和泉本町1-1-5
☎3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp

編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press
〒201-0012 狛江市中和泉3-2-16
プランツベルツ201
☎3430-6617 FAX3430-6743
Email=wacco@k-press.net

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市市民協働課へ

2006年



いかだレース 狛江の夏の名物行事。こしは15日午前9時30分から催される

清流に子どもたちの歓声

多摩川



● 写真中の数字は撮影された年

東京近郊の行楽地として古くから親しまれた多摩川。水泳などの川遊びを楽しむ人やアユをはじめとした川魚を目当てに多くの人々が訪れた。六郷用水取り入れ口北側（中和泉）には明治39（1906）年に公園が造られ、大正2（1913）年には園内に料亭も開業、「玉翠園」の名で多くの人に親しまれ



た。多摩川は地元の子どもにとっても格好の遊び場だったが、昭和30年代に入ると、流域の開発と昭和32（1957）年の小河内ダムの完成などで水質の悪化と水位の低下が進み、清流のおもかげは失われた。しかし、水質をはじめとした河川環境改善への取り組みが実り、市民のオアシスとしてにぎわいを取り戻している。

多摩川のほとりにあった玉翠園

塚原ヤエ子さん(77歳・岩戸北)の話
祖父の井上半三郎が経営していた料亭「玉翠園」を手伝うため、小学校のころ一時、家族とそこで暮らしていました。多摩川に面したところまでが敷地で、当時、地元では「公園」と呼んでました。公園には都内の学校の林間学校用の宿泊施設があり、泊まり客があるときは、わたしも売店の店番などを手伝いました。

6月1日の午前0時がアユの解禁で、川



いまでも残る玉翠園の石垣

へ向かう釣り人のサオに付いた鈴の音色があちこちで聞こえるのを楽しみました。0時前に家族で川岸へ行って、打ち上げ花火の合図で釣り人が一斉にサオを下ろすのを見るのも楽しみのひとつでした。

六郷用水の取り入れ口の近くには竹の蛇籠の堰があり、その上流ではアユがたくさん採れました。いまの五本松付近の堤防は針金製の蛇籠でした。わたしたち兄弟は、堰の下の浅くなっているところで泳ぎました。わたしは、結婚前の昭和27（1952）年まで泳ぎましたが、船に乗った知り合いの男性に声をかけられて、水着姿を見られたのが恥ずかしかったのを覚えています。



川から見た玉翠園 大正時代



うらやましかった川の家

絹山達也さん(61歳・東和泉)の話
2つ上の兄が釣り好きで泳ぎが達者だったので、兄弟で小田急線の鉄橋下付近へ遊びに行きました。自分の足の指が見えるぐらい、水がき



れいでした。近くには小田急の「川の家」があって、子どもがたくさん遊んでいました。川を渡るシャワーがうらやましかったですね。小学校低学年の時、鉄橋近くの浅瀬で遊んでいて、なんかの拍子で深みにはまっておぼれ死にそうになったのを、兄に助けられました。命をもらったといまでも思っています。実は、その時の恐怖で、いまも泳げないんですよ。

冷たかった多摩川の水

妻の寿子さん(60歳)の話
第一小学校の1年か2年の時、学校からみんなで五本松近くへ水泳に行ったことがあります。岸边にはアシがいっぱいで服が置けなくて、松にタオルと服をかけたことを覚えてます。水がすごく冷たくて、泳ぐというより水遊びみたいでした。

川底までよく見えた

小川昭治さん(79歳・猪方)さんの話
小さいころは近くの用水や小川で遊んだけど、小学校4、5年生になると、夏の午後は毎日のように多摩川で水遊びをしました。遊び場は二ヶ領宿河原堰の下で、同じ年ごろの仲間5、6人と遊びました。当時は六尺ふんどしでしたよ。当時の堰はまだコンクリート製じゃなくて、木組みの中に石を入れ、その上に土のうが積んでありました。水面はいまよりかなり上で、護岸は竹の蛇籠でした。水がきれい、川底までよく見えたから、投げこんだ白い石を仲間と潜って取りっこしたり、箱眼鏡をかけて手製のモリで魚をついたりしました。魚がひっかかると鈴が鳴る「団子釣り」は泳ぎながらできるので、よく岸にサオを仕掛けておきました。この遊び

川で釣りを楽しむ人たち。ワイシャツにネクタイの人も見

場には、女の子はいなかったですね。深いところや流れが速いところがあったけど、流れに合わせた泳ぎ方をしたから危ないとは思いませんでしたよ。3時過ぎまで遊んで、ふんどしを川で洗ってモリや釣りザオに引っかけて乾かしながら家に帰って、家の仕事を手伝いました。

毎日じゃないけど、夕方堤防の蛇籠の間にウナギドウを仕掛け、朝早く取りに行くのも楽しみでした。ウナギは家の生けすいに入れましたが、親が時々料理屋へ売りに行ってたようです。父が投網でアユを採るときは付いて行って船をこいだりしました。



釣り人 戦前



臨川学園 戦前

多摩川で泳ぐ子どもたち。昭和7年から都内の児童のための「臨川学園」が開設された。



中州 戦前

多摩川の中州から下流の和泉多摩川方面を望む



子ども集団で川遊び

大津勲さん(60歳・駒井町)の話
多摩川のすぐそばに家があったので、夏休みは朝から水着のまま川へ行き、昼飯で家に戻るまでは、夕方まで川で遊んでました。小さい子から中学生ぐらいの男女一緒に遊んでました。父が投網でアユを採るときは付いて行って船をこいだりしました。

決まったリーダーはいなかったけど、年上の子が小さい子の面倒をみるのが当たり前だった。わたしは2、3歳上の子について遊ぶうちに自然に泳ぎを覚え

ました。深い砂利穴もあったけど、先輩が危ないところを教え、おぼれる寸前に助けに来てくれました。

釣りがよくやりました。川向こうの耕地へ行く船や釣り船をひっくり返したりするのを見てもやりました。

中学生ごろから釣り船をこぐの覚え、高校生ときは「川仙」に頼まれて投網をする人を乗せたりしました。そのころは、お客に投網をやらせてもらうのが楽しみでした。

小学生のころは水がきれいだったけど、中学生になると下水が流れ込んで水の汚れがめだつようになりました。高校生になってからも、遊泳禁止だったかもしれないけど、泳いだことがあります。

写真提供=久保共さん(故・久保春洋さん撮影)、井上君代さん、井上俊雄さん(故人)、資料=『狛江市の民俗Ⅳ』(狛江市教育委員会)、『小田急25年史』(小田急電鉄) 取材協力=塚原ヤエ子さん、絹山達也さん、絹山寿子さん、小川昭治さん、大津勲さん(順不同)